

ヨナ書

第一章

一 エホバの言アミタイの子ヨナに臨めりいはく 起てかの大なる邑ニネベに往きこれを呼はり責
 二 めよそは其悪わが前に上り來ればなりと しかるにヨナはエホバの面をさけてタルシシへ逃れん
 三 と起てヨツバに下り行けるが機しもタルシシへ往く舟に遇ければその價值を給へエホバの面をさけて借にタルシ
 四 シへ行んとてその舟に乘れり

四 時にエホバ大風を海の上に起したまひて烈しき颶風海にありければ舟は幾んど破れんとせり 五 かよりし

六 下りゐて臥て酣睡せり 船長來りて彼に云けるは汝なんぞかく酣睡するや起て汝の神を呼べあるひは彼われら

七 を眷顧て淪亡ざらしめんと かくて人衆互に云けるは此災の我儕にのぞめるは誰の故なるかを知んがため

八 去來鬪を撃んとやがて鬪をひきしに鬪ヨナに當りければ 九 みな彼に云けるはこの災禍なにゆゑに我らにのぞめ

九 るか請ふ告げよ汝の業は何なるや何處より來れるや汝の國は何處ぞや何處の民なるや 一〇 ヨナ彼等にいひけるは

一〇 我はへブル人にして海と陸とを造りたまひし天の神エホバを畏るゝ者なり 是に於て船夫甚だしく懼れて彼に

云けるは汝なんぞ其事をなせしやとその人々はかれがエホバの面をさけて逃れしなるを知れり其はさきにヨナ

彼等に告たればなり

二 遂に船夫彼にいひけるは我儕のために海を靜かにせんには汝に如何がなすべきや其は海いよいよ甚だしく

イ王下一四・二五 太 拿三・二三、四 喇九・六 雅五・四 ホ番一九・四六 代下 一二、二七 三三八 九耳二・一四 一四・四一、四二 續
 一・二三九 一 歌一八・五 二・二六 徒九・三六 ト詩一〇七・二五 一六・三三 徒一・
 口創一〇・一一、一二 八創一八・二〇、二二 二拿四・二二 へ創四・二六 伯一・ 徒二七・二八、一九、 又詩一〇七・二八 前一〇・二〇、二一、 二六

七卷七・一九 母前
 一四・四三
 カ詩一四六・六 徒
 一七・二四
 ヨ約二・五〇
 夕織二・三〇
 中二一・八
 ツ詩一一五・三
 ツ詩八九・九 路八・二四
 ネ可四・四一 徒五・〇一、一四二・一
 哀三・五五、五六
 ム詩六五・二
 ナ太二・四〇、一六
 ム詩八一・三〇
 ヲ路一一・三〇
 ヲ路二〇・一、一三
 五詩八八・六
 ノ詩四二・七
 才詩三一・二二
 ク王上八・三八
 ヤ詩六九・一 哀三・五四
 マ詩一六・一〇
 ケ詩一八・六
 フ王下一七・一五 詩
 三一・六 耶一〇・八、一六・一九
 ヲ詩五〇・一四、二三
 一一六・一七、一八
 何一四・二 來一三
 一五
 エ詩三・八

狂蕩たればなり 二三 ヨナ彼等に曰けるはわれを取りて海に投いれよさらば海は汝等の爲に靜かにならんそはこの

大なる颶風の汝等へのぞめるはわが故なるを知ればなり 二三 されど船夫は陸に漕もどさんとつとめたりしが終に

あたはざりき其は海かれらにむかひていよいよ烈しく蕩たればなり 一四 こゝにおいて彼等エホバに呼はりて曰け

るはエホバよこひねがはくは此人の命の爲に我儕を滅亡したまふ勿れ又罪なきの血を我らに歸し給ふなかれそは

エホバよ汝聖意にかなふところを爲し給へるなればなりと 一五 すなはちヨナを取りて海に投入たりしかして海の

あることやみぬ 一六 かゝりしかばその人々おほいにエホバを畏れエホバに犠牲を獻げ誓願を立たり

さてエホバすでに大なる魚を備へおきてヨナを呑しめたまへりヨナは三日三夜魚の腹の中にあき

ヨナ魚の腹の中よりその神エホバに祈禱て 二曰けるはわれ患難の中よりエホバを呼びしに彼

われにこたへたまへり われ陰府の腹の中より呼はりしに汝わが聲を聴たまへり 汝我を淵のうち

海の中に投入れたまひて海の水我を環り汝の波濤と巨浪すべて我上にながる 四 われ曰けるは我なんぢの目

の前より逐れたれども復汝の聖殿を望まん 五 水われを環りて魂にも及ばんとし淵我をとりかこみ海草わが

頭に纏へり 六 われ山の根基にまで下れり地の關木いつも我うしろにありきしかるに我神エホバよ汝はわが命

を深き穴より救ひあげたまへり 七 わが靈魂衷に弱りし時我エホバをおもへりしかしてわが祈なんぢに至りな

んぢの聖殿におよべり 八 いつはりなる虚き者につかふるものは自己の恩たる者を棄つ 九 されど我は感謝の聲

をもて汝に獻祭をなし 又わが誓願をなんぢに償さん 救はエホバより出るなりと 一〇 エホバ其魚に命じたまひ

第二章

ければヨナを陸に吐出せり

第三章

一 エホバの言ふたゞびヨナに臨めり曰く 二 起てかの大なる府ニネベに往きわが汝に命ずるところ
 を宣よ 三 ヨナすなはちエホバの言に循ひて起てニネベに往りニネベは甚だ大なる邑にしてこれを
 四 めぐるに三日を歴る程なり ヨナその邑に入はじめ一日路を行つゝ呼はり曰けるは四十日を歴ばニネベは滅亡
 さるべし

五 かゝりしかばニネベの人々神を信じ斷食を宣れ大なる者より小き者に至るまでみな麻布を衣たり 六 この
 言ニネベの王に聞えければ彼位より起ち朝服を脱ぎ麻布を身に纏ふて灰の中に坐せり 七 また王大臣とともに命
 をくだしてニネベ中に宣しめて曰く人も畜も牛も羊もともに何を味ふべからず又物をくらひ水を飲べからず

八 人も畜も麻布をまとひ只管神に呼はり且おのおの其悪き途および其手に作す邪惡を離るべし 九 或は神その
 一〇 聖旨をかへて悔い其烈しき怒を息てわれらを滅亡さざらん誰かその然らざるを知らんや 一〇 神かれらの爲すところ
 をかんがみ其あしき途を離るゝを見そなはし彼等になさんと申し所の災禍を悔てこれをなしたまはざりき

第四章

一 ヨナこの事を甚だ悪しとして烈く怒り 二 エホバに祈りて曰けるはエホバよ我なほ本國にありし
 時斯あらんと曰しに非ずやさればこそ前にタルシシへ逃れたるなれ其は我汝は矜恤ある神憐憫あり
 怒ること遅く慈悲深くして災禍を悔たまふものなりと知ばなり 三 エホバよ願くは今わが命を取たまへ其は生る
 ことよりも死るかた我に善ればなり 四 エホバ曰たまひけるは汝の怒る事いかで宜しからんや 五 ヨナは邑より
 出てその東の方に居り己が爲に其處に一の小屋をしつらひその蔭の下に坐して府の如何に成行くかを見る

イ創三〇・八 詩三六 八太二・四一 路 ホ代下二〇・三 耳二 卜摩五九・六
 六、八〇・一〇 一・三三二 一・一五 一・二二 耳 三、六 三、六
 口申一八・二二 二伯二・八 へ察五八・六 二・二四 又摩一・三 三、六
 一、一八・八 摩七、ル出三四・六 詩八六 一、一八・八 耳二、一三
 五、耳二、一三 一、一八・八 耳二、一三 一、一八・八 耳二、一三

六 エホバ神瓢を備へこれをして發生てヨナの上を覆はしめたりとはヨナの首の爲に庇蔭をまうけてその憂を
七 慰めんが爲なりきヨナはこの瓢の木によりて甚だ喜べり されど神あくる日の夜明に虫をそなへて其ひさを
八 噛せたまひければ瓢は枯たり かくて日の出し時神暑き東風を備へ給ひ又日ヨナの首を照しければ彼よわりて
九 心の中に死ることを願ひて言ふ生ることよりも死るかた我に善し 神またヨナに曰たまひけるは瓢の爲に汝の
一〇 いかる事いかで宜しからんや彼曰けるはわれ怒りて死るともよろし エホバ曰たまひけるは汝は勞をくはへず
二 生育ざる此の一夜に生じて一夜に亡びし瓢を惜めり まして十二萬餘の右左を辨へざる者と許多の家畜とある
この大なる府ニネベをわれ惜まざらんや

ヨ ナ 書 をはり